

総会記念講演会

東北の今は ～震災から5年～

2016.6.5

2016年6月5日、年輪で第18回総会を開催しました。総会后、被災した岩手県山田町で中高学生の学習支援の「ゾンタハウス」や高齢者の居場所「街かどギャラリー」を運営している舟田春樹さんに「東北の今」について、「ゾンタハウス」のサポートに参加した学生さんには「活動報告」と被災地の子供たちの意見交換会について、それぞれ講演をしていただきましたので、ご紹介します。

(岩手県山田町 「山田町ゾンタハウス」街かどギャラリー事務局長)
講師 舟田春樹さん

東日本大震災から5年経過して

3.11 東日本大震災から早いもので5年が経過しました。現在各地区では復興の姿が形となって表れてきており希望の光も見えつつある状況です。

しかし、あの悲惨な状況のなか途方に暮れた日々は一生忘れる事はできないでしょう。

ここ山田町も八百数十名の方々が亡くなっています。改めて不本意な生涯を閉じた友人知人の皆様にはただただご冥福を祈るばかりです。

そんな状況のなか、安岡理事長さんはじめ全国の皆様から今まで沢山の温かいご支援を頂きました。

お陰様で現在はホッと一息つきながらゾンタハウスを利用する中学生はもとより小学生や一般の高齢者も希望を持って明るく毎日を過ごしている状況です。

皆様方には改めてこの場をお借りし厚くお礼申し上げます。

早いものであの震災から5年がたち、高さ6.3mの既存堤防の場所には9.7mの高い堤防ができ、巷では復興が遅い遅いと言われるも、現在では住まいを仮設住宅から災害公営住宅に移られた方もいます。比較する訳ではありませんがフィリピンの大地震ではいまだにがれきが残っていたりすることを考えると、日本の復興する力はすごい事だと言えます。

脳裏に焼きつくあの日の被害状況

6.3mの堤防を乗り越えて、9.7mの津波がきました。堤防の高さを超えることはないだろうと信じて避難しなかった人もかなりいて、その人たちは一気に流れ込んだ海水で押し流されてしまいました。



震災前の山田町



町は地震直後津波に一瞬にして飲み込まれた

津波が去った後、火事が発生しました。道路はがれきで車の通行はできない、人の往来もできない。静まり返った光景の中、私はせめて風が吹かなければいいと願っていました。



夕方6時、西風が吹いてどんどん延焼していく。町が消滅してしまうかもしれない状況。これからどうなるのか。家族は？一緒に働いていた職員は？しかし、パニックになるのではなく、なぜかとても冷静な自分がいました。



震災の夜、避難所の状況

町役場に隣接した避難所のコミュニティセンターや中央公民館・保健センターには、寝たきり高齢者やケガ人が担ぎ込まれ数百人の被災者が不安な夜を過ごしました。

寒さに加えて、停電・断水のため急きょロウソクを灯し、施設のカーテンを外すなど、あらゆる布を利用して寒さをしのぎ、また近くの沢から水を汲み水洗トイレに使用するなど、その場その場で手探りの対応が続きました。

夜半過ぎには風向きが変わり始め、この避難所も危なくなり10km離れた隣の地区に再度避難することを迫られました。しかし、情報や道路が全て寸断され車両の手配が難しい状況のなかで避難者を安全に搬送することの難しさを感じながら必死で対応せざるを得ませんでした。また、時折自分の家族は？と考える事もありましたが、やはり目の前のケガ人や保育園の子供たち及び高齢者の安全を考えると無我夢中で対応することは当然の成り行きでした。

車のオイルや漁業で使っていたオイルタンクが流れてきて、油臭い。こげ臭い。黒焦げの町。これは現実？それとも夢なのか？まぼろしなのか？



2日後、ようやく自衛隊が到着し、物資の輸送のため道路のがれきを除く作業と同時に、遺体の捜索も開始されました。遺体を発見するたびに手を合わせる自衛隊員の姿が今も心に浮かびます。



復興に向けて…その後の様子

震災後1年半経過すると、次第にがれきがなくなり、仮設店舗ができればじめ商店の活動が再開され始めました。また、5年が経過し、道路は整備が進み、災害公営住宅や津波防潮堤などが次々完成しています。



被災の状況

山田町は東日本大震災によって、市街地の大半が壊滅的な被害を受け、800余名が死亡ないし行方不明となり、倒壊家屋は3300棟にも及びました。船越地区の高台にある船越小学校では、遠くの波を目を凝らして見ていた地元の校務員さんの機転で更に児童生徒を高台に避難誘導したことが児童生徒一人の犠牲者も出さずに済んだと報道されました。

しかし、その校庭に避難していた一般の方々は残念ながら高さ18mの津波に飲み込まれるなど、個人の判断の違いにより運不運の現実を見せつけられました。ただただ…ご冥福を祈るばかりです。

被災直後の行動と役割

被災直後、山田町教育委員会生涯学習課を3月で退職し4月より災害対策本部にて再任用勤務、仮設住宅建設予定地の現地調査や、避難所で暮らす方々への物資の手配、困り事相談など聞き取り調査を行いながら少しでも被災者への力になるよう務めてきました。

避難所では、ショックのあまり話すことの出来なくなった方や悲しみにくれる高齢者、安否確認できず遺体安置所を回っている方々にはなかなか掛ける言葉も見つからず、それぞれの被災者にはただただ黙って頷きながら話を聞いてあげることが精いっぱい状況でした。

将来を担う子供たちへ

震災直後、全てが劣悪な環境のなかで大人たちは明日からの生活そのものが最優先でありました。子供たちの学習環境はというと、悲惨な被災状況だけに手つかずであり置き去りの状態が続きました。

そんな状態が更に続けば、当然学力は低下し被災地がゆえに子供たちは社会から取り残される事が懸念されました。やはり被災地であっても将来を担う子供たちには遅れを取り戻して更に力をつけて世の中に送り出してやる事が地元大人の責任ではないかと考えておりました。

そのようなところに、東洋大学社会福祉学部森田明美教授より山田町における学習支援策が提案され、現地受け入れスタッフとして竹内・佐藤・舟田の3名が山田町ゾンタハウス・街かどギャラリーの立ち上げや運営活動に参画することとなったものです。



震災後4ヶ月、被災した空き店舗を賃借し、ゾンタハウス開設に向けて補修工事開始。



山田町ゾンタハウス、街かどギャラリーの活動風景。2Fが学習スペース、1Fは歓談したり活動したりするギャラリースペース。



山田町ゾンタハウスには、全国のゾンタハウスの方々が必要な物資を調達してくれました。この写真はゾンタハウスに支援頂いてる、国際ゾンタクラブ26地区一行との記念撮影。

被災地中高生との意見交換会参加

ゾンタハウス中高生たちは東京で開催の3県被災地中高生意見交換会に毎年参加しています。また、その中高生たちは東洋大学ゼミ生の学習支援や様々なサポートを受けながら、将来に向けた力を養う機会を得ています。

震災後5年が経過しました。昨今、東北の被災地が忘れ去られていくという状況を考えると、明日を担う中高生にとっては大学生達のサポートは非常に有難く地元スタッフとしても心強い絆を感じております。



岩手・宮城・福島
の被災地中高生達は熱心に
意見交換し絆が深まります。

終わりに…「ふるさと山田を取り戻したい!」

あの3.11の大震災で山田の街並みは姿を消し歴史の中に封じ込められてしまいました。色彩豊かな素晴らしい山田の風景はとても懐かしく、今でも様々な思い出のざわめきが聞こえてきます。

今回の報告のように、ゾンタハウスの中高生たちは5年間にもおよび森田先生はじめ、兄・姉貴のようなゼミ生からも常にサポートされ、同時に全国の多くの皆様にも支えられ日々成長してきました。最近においては、東京でのシンポジウムで意見発表や体験発表をしてきた高校生たちから「今度は自分たちが山田を元気にするため何か活動をしたい!」という意思が示され、今年度から地元高校生による「ZOOcafe」を開設し地域の方々や中高生の居場所づくりを行うため現在ラテアートに挑戦し猛特訓中です。

このように震災後5年が経過しハード面は整備されつつありますがやはり心の拠りどころとなる場所や温かい人間関係はなお一層重要になるものと思われまます。そのような状況から明日を担うゾンタハウスの中高生たちは、皆様の支えを糧に新しいふるさと山田を取り戻すため張り切って活動し始めております。

5年が経過しました。今後ともご支援頂いている皆様には、末永く山田の子供たちを見守って頂きますよう宜しくお願い致します。